

# 聴覚障害乳幼児教育相談の 現状と課題



全国聾学校長会

村野一臣(立川)、朝日滋也(大塚)

# 内 容

- 乳幼児教育相談(0～2歳児)の状況  
経緯、相談者数等、指導体制
- 乳幼児教育相談による早期対応の成果  
保護者が最も支えになったこと
- 乳幼児教育相談の実際  
乳幼児教育相談担当者の専門性
- まとめ

# 乳幼児教育相談の経緯

- 1960年代 日本聾話学校 2歳児クラス⇒0～3歳未満の乳幼児グループ 70年代 静岡県公立聾学校3校に設置 75年兵庫県立こばと聾学校 幼稚部と保育相談部での3未満児教育
- 早期教育の重要性
- 1975年以降⇒各地のろう学校で乳幼児教育相談として一般化⇒**制度の狭間で各県の努力、校内操作で体制を維持** ⇒約50年の歴史
- 特別支援学校のセンター的機能としての位置づけ
- 新スク、人工内耳等状況変化⇒**必要性の増大**

# 乳幼児教育相談の状況①

- 平成28年度0歳～2歳の定期的支援
- 1813名(0歳:609名、1歳569名、2歳:635名)⇒各年齢ほぼ同数
- 述べ面談件数は、年齢に伴い増加⇒2歳児は0歳児の2倍強
- 地区、学校間の差異がかなりある⇒関東、東海、近畿が多い
- 東京都では年々増加し、30年度は3校で計404名

# 乳幼児教育相談の実態調査

## ○H28.6 全国聾学校長会で実態調査

- ・平成27年度聴覚特別支援学校乳幼児教育相談実態調査

## ○H29.5 聴覚障害者教育福祉協会に聴覚障害乳幼児教育相談研究委員会を設置

## ○H29.7～委員会：文科省委託事業として実態調査

- ・同研究委員会に調査研究委員会を設置、28年度調査を拡充、実態調査1, 2を作成・実施

# 定期的相談児の状況（H28年度）

	通学児	%	幼児 数/年	訪問 児	%	計
0歳児	601	98.7	6.0	8	1.3	609
1歳児	565	99.3	5.7	4	0.7	569
2歳児	634	99.8	6.3	1	0.2	635
合計	1800	99.3	6.0	13	0.7	1813

$\chi^2(2) = 3.658$  , ns

- 0歳～2歳児からの定期的支援
- 通学児の全国平均：6.0人/学齢
- 通学児99%、訪問0.7%

# 年齢別年間面談者数

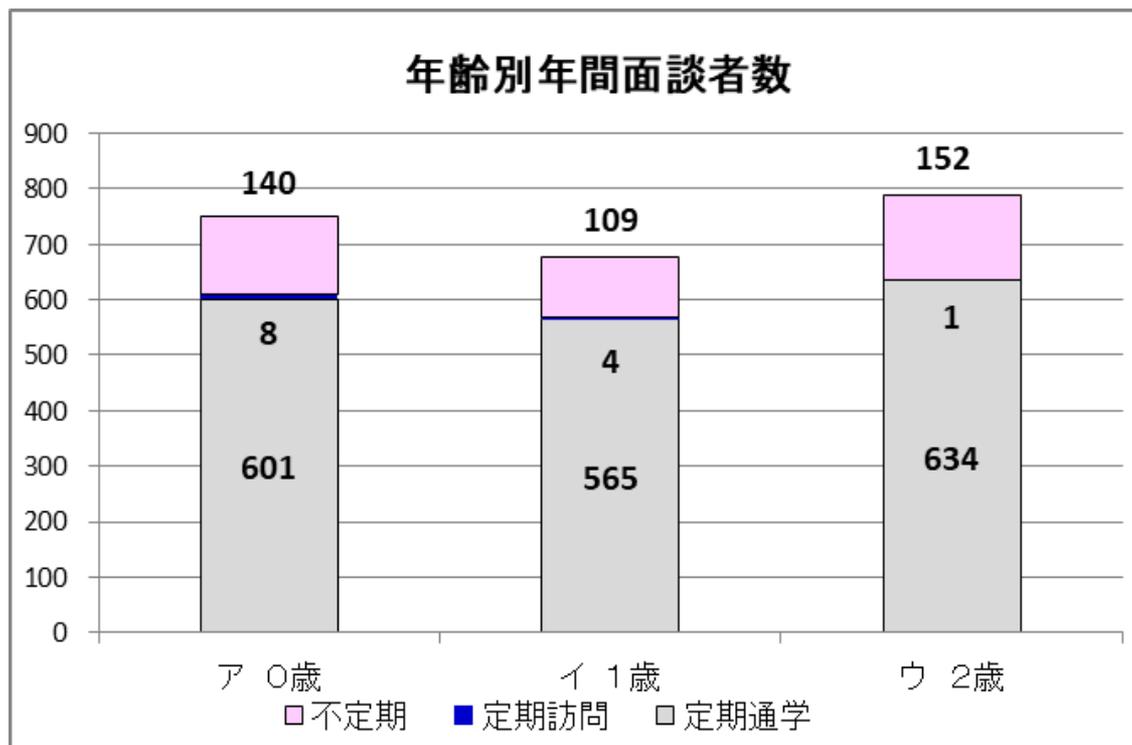


図1

# 年間面談件数(延べ)

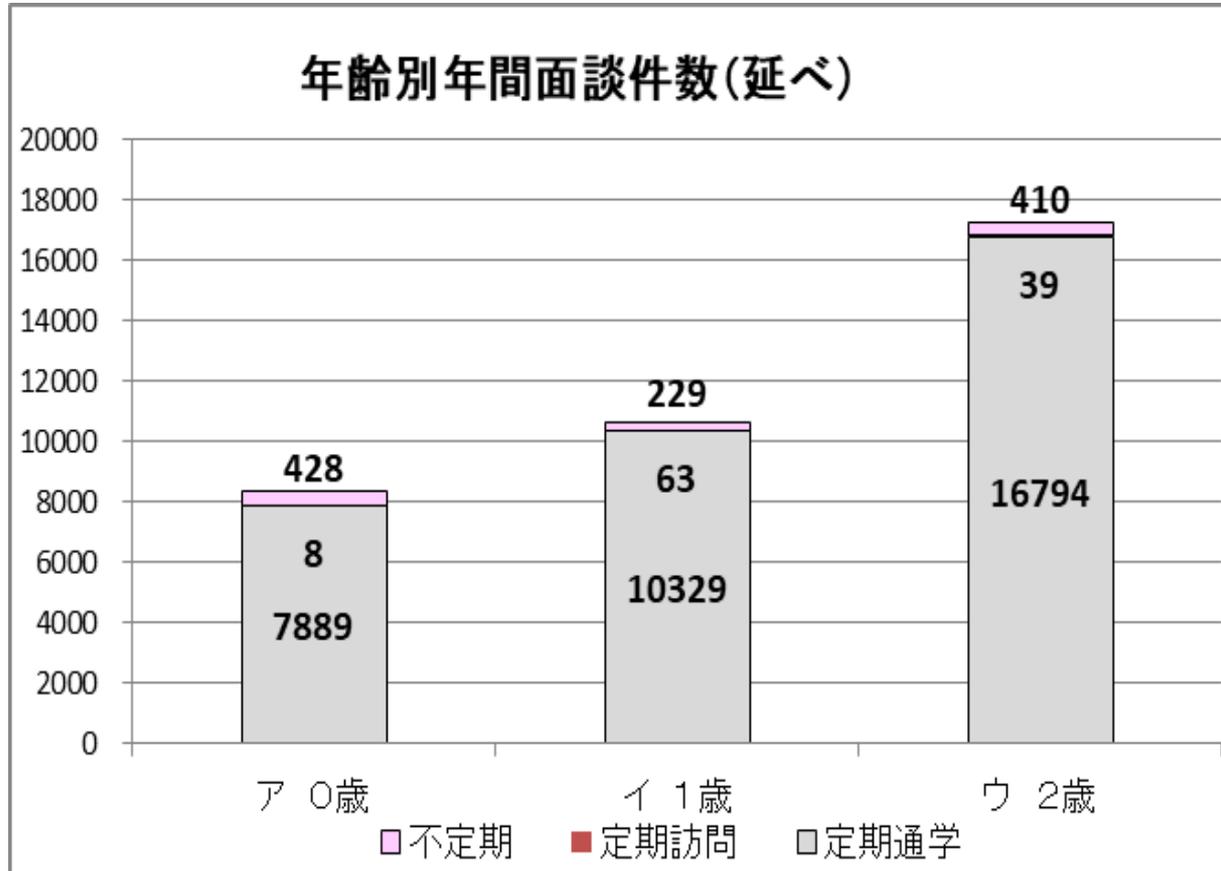


図3

# 地区別：実施校年間定期的支援児数

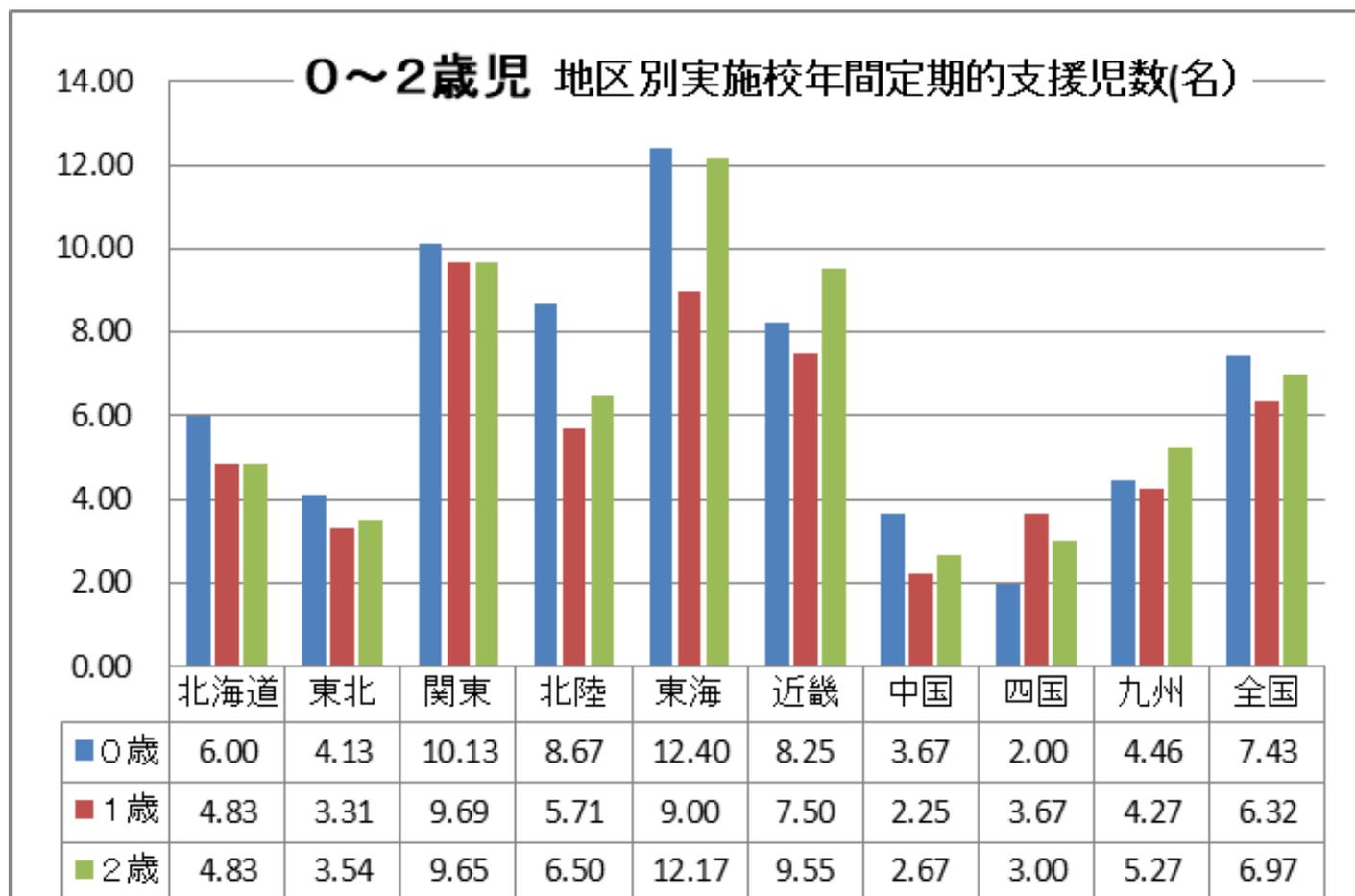


図2

# 地区別：実施校年間面談件数（延べ）

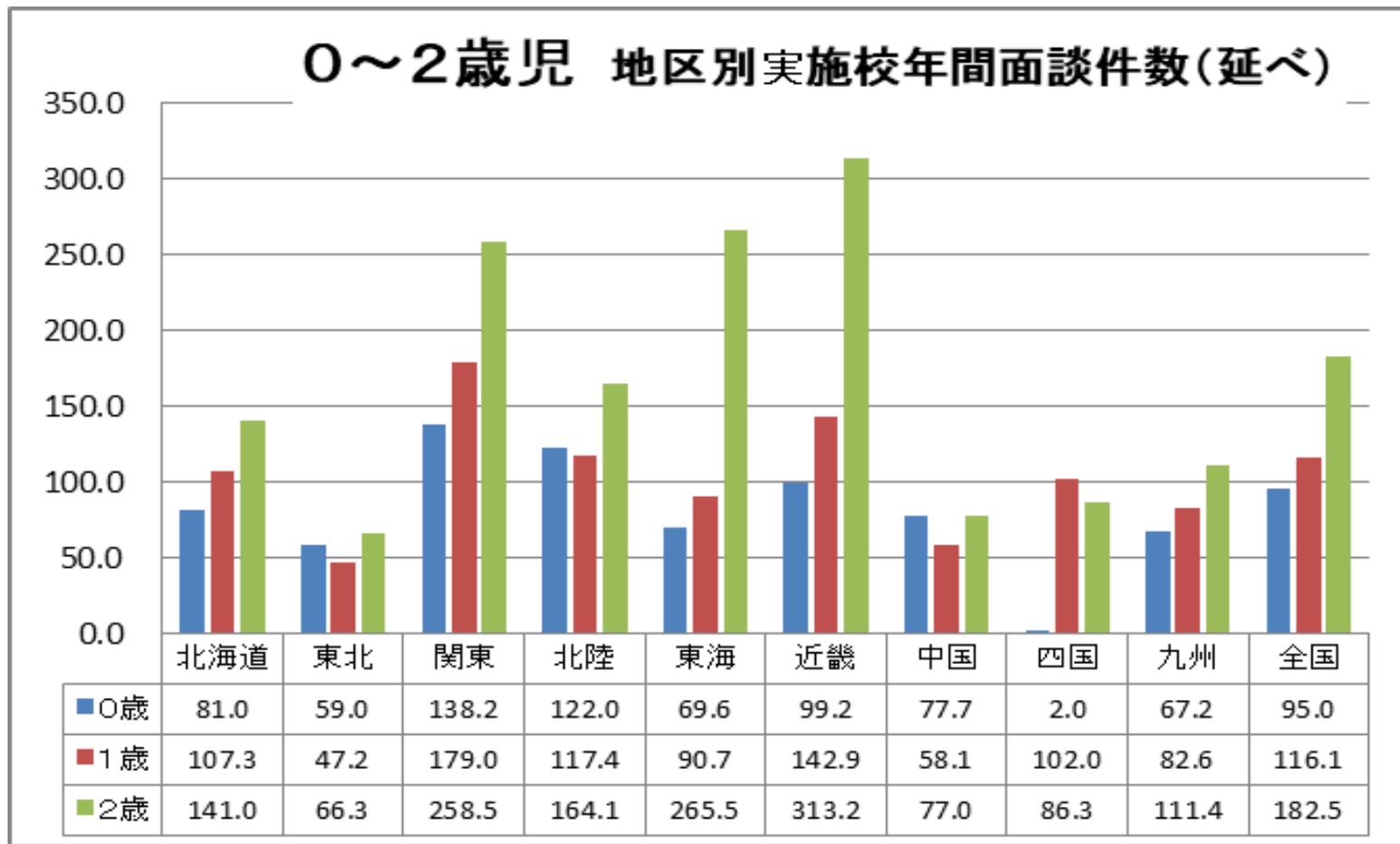
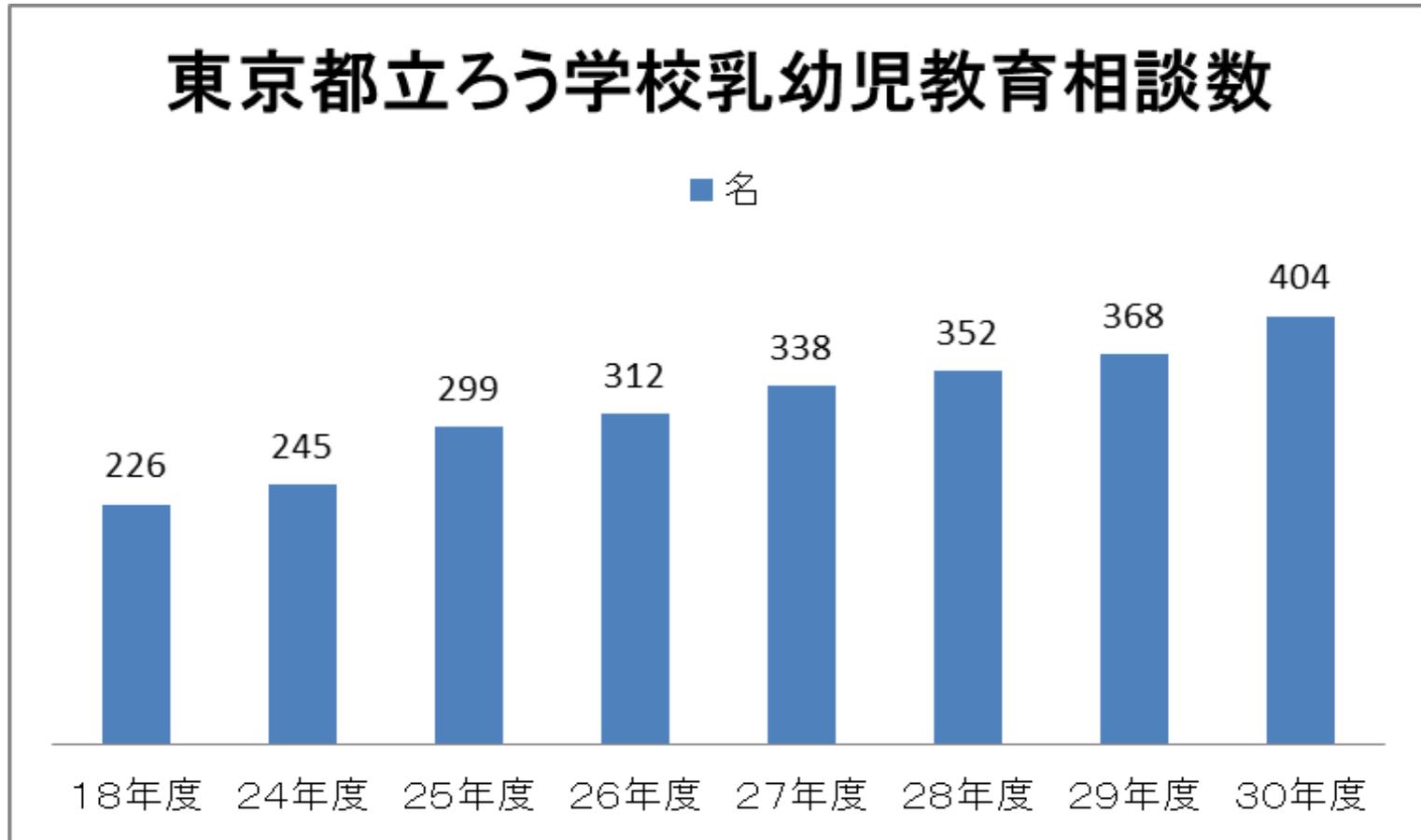


図4

# 東京都の場合（3校）



## 乳幼児教育相談の状況②

- 1歳未満児教育相談の開始月は、平均4.34か月 ⇒ 新生児聴覚スクリーニング検査後にろう学校に相談、その後定期的支援へ移行
- 障害の程度は、軽中等度(70dB未満)38%、高度(70~89dB)22%、重度難聴(90dB以上)35%、重複障害児の割合23% ⇒ 幅広い聴覚障害児が対象

# 教育相談開始の最少年齢(学校単位)

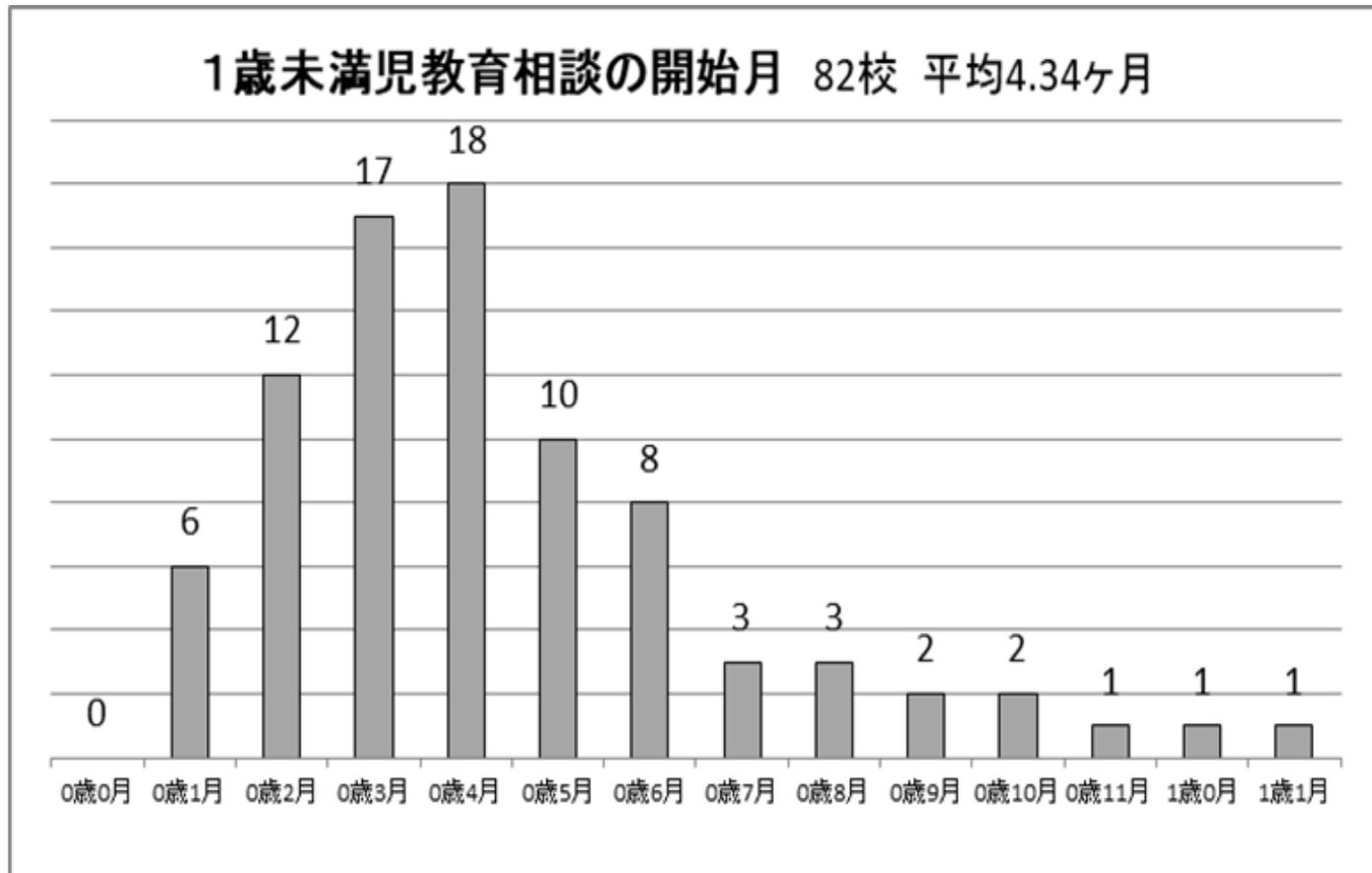
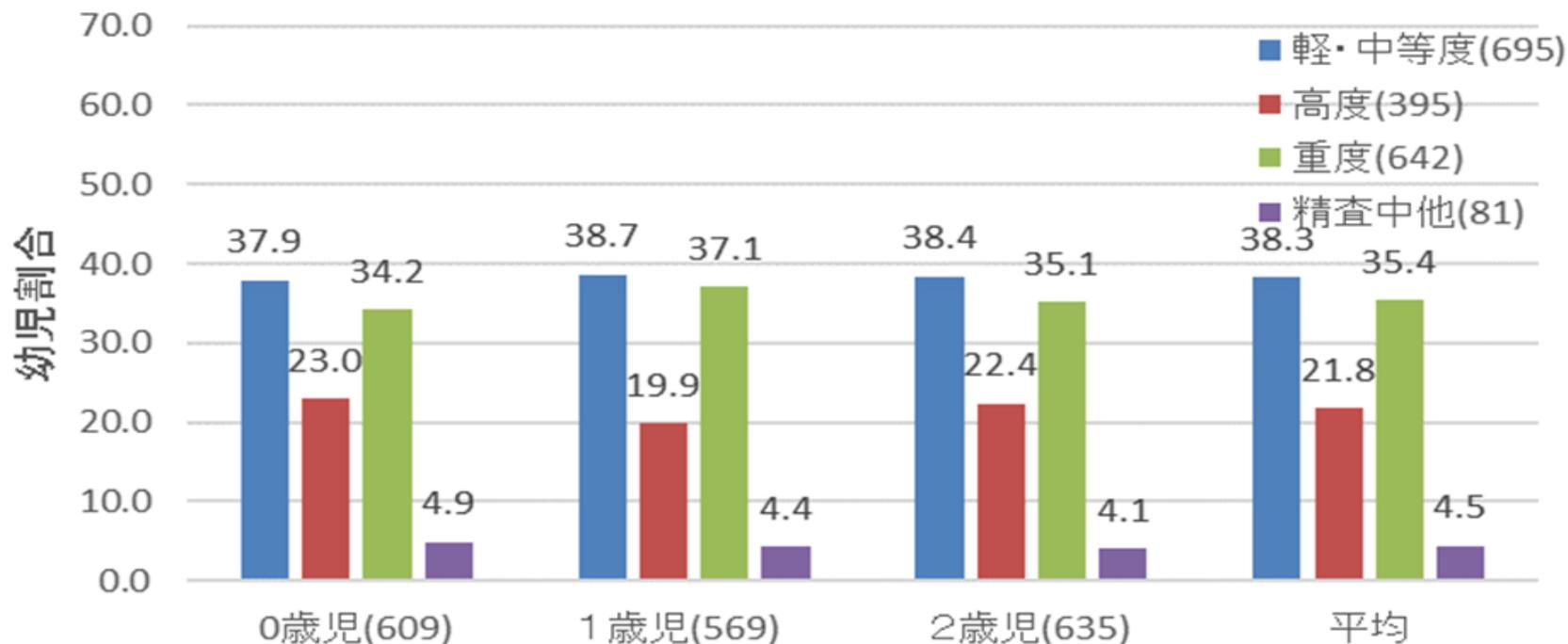


図5

# 定期的相談児の障害の程度

乳幼児の聴力程度別分布, n=1813



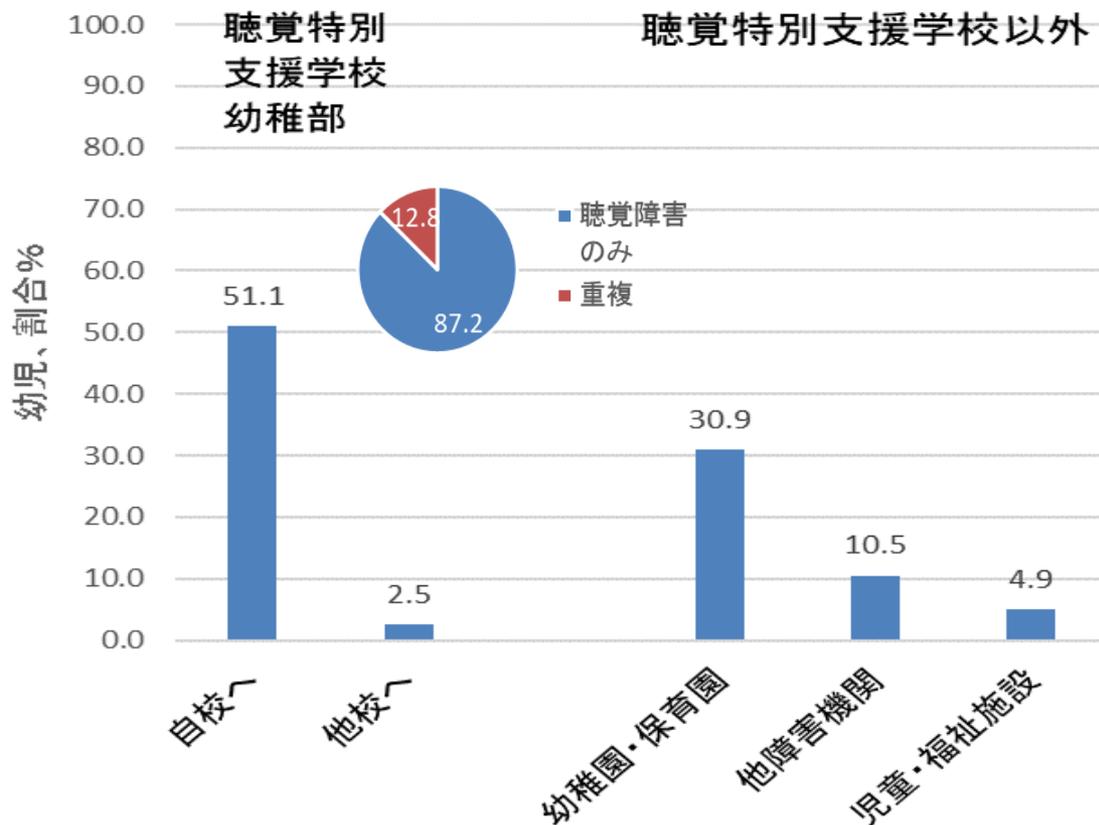
0歳～2歳児で軽中等度難聴児 38%

# 乳幼児教育相談の状況③

- 3歳児以降の進路：ろう学校幼稚部53%、幼稚園・保育園31%、児童・福祉施設等5%、他障害施設10%⇒定期支援からろう学校（聴覚障害特別支援学校）幼稚部への進学が50%強
- 継続支援：幼稚園・保育園進学者69%、児童・福祉施設進学者68%、他機関移行者91%⇒ろう学校以外に進学した場合も7割を超す幼児をろう学校が継続支援している（センター的機能）

# H28年度 2歳児の進路

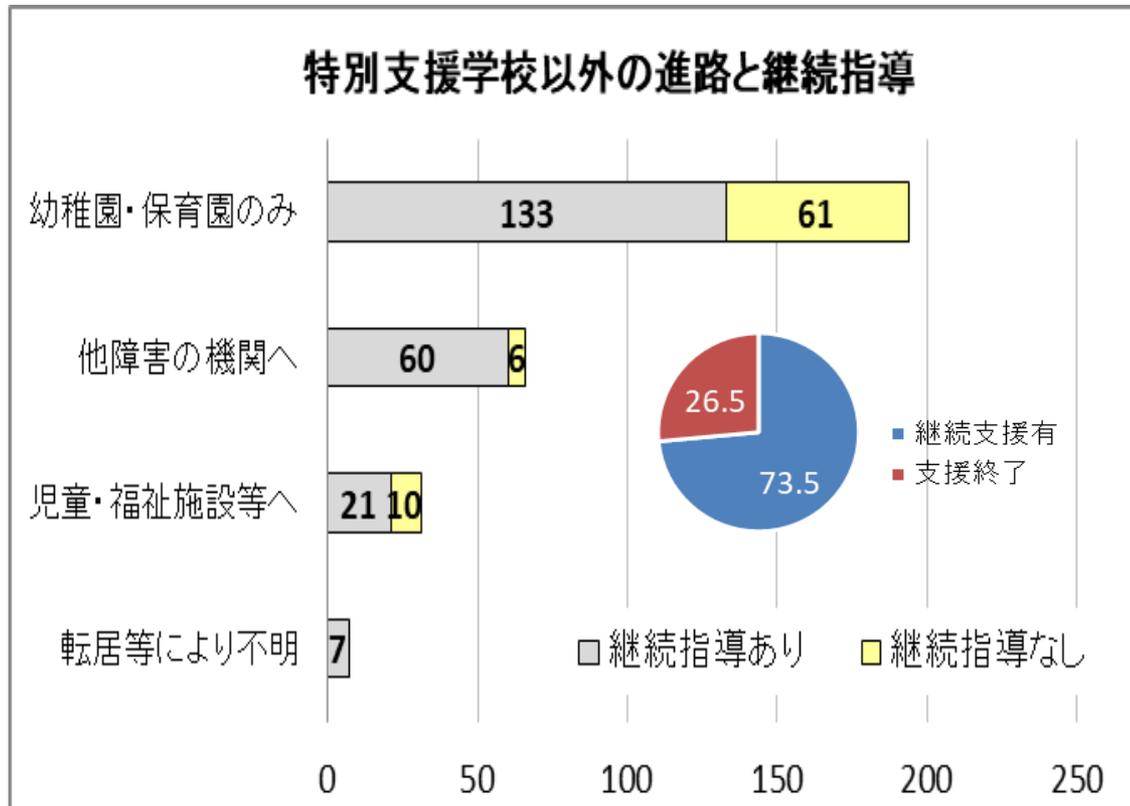
2歳児進路、n=628



- 2歳児終了時に337名(54%)が聴覚特別支援学校へ

定期的支援児の内、軽・中度児は38%  
重度・高度障害児の多くが幼稚園へ

# 特別支援学校以外の進路と継続指導



- 幼稚園部以外に進んだ場合：

幼稚園・保育園入園児／児童・福祉施設等へ移行児の約7割、他障害機関への移行児の約9割に継続支援（センター的機能を発揮）

図5

# 乳幼児教育相談の指導体制①

## 求められる高い専門性

- 乳幼児教育相談の指導者は、定数化されていないため、教育相談等の教員加配等で対応しているが、多くの学校が校内操作によって工夫しながら対応している。
- 実態調査では、教員1名の担当乳幼児数は、9.77だったが、地域により差がある。
- 担当教員は、保護者への対応が重要となるため、ベテランの教員の配置をしている。⇒  
聴覚障害教育の入口として高い専門性が求められている。

# 乳幼児教育相談の指導体制②

## 人的・物的環境の不安定さ

- ・人的配置の不安定さによる**専門性の継承・向上の難しさ**、**担当者研修と養成の問題**（校内での理解の必要性、専任配置の困難さ、人員不足など）
- ・乳幼児数の変動、**超早期化・障害多様化への対応**
- ・**保護者の多様化への対応**
- ・予算・設備整備上の問題
- ・関係機関連携との連携・組織化に関わる問題

# 職員配置

- 教育相談に関わる何らかの教員加配あり(乳幼児教育相談担当、センター的機能促進、コーディネーター加配等)は41校(58名)。乳幼児相談事業を都道府県事業としている場合もあるが、多くの学校(64%)が学校裁量、校内操作によって教員を配置している。
- 専任、兼任、非常勤と勤務形態は多様。

表19

	専任のみ			兼任のみ			専任+兼任			不在	
		(非常勤)			(非常勤)		(非常勤)				
学校数	45校	93名	(20名)	35校	62名	(0名)	20校	73名	(11名)	0校	0名
割合	45.0%	40.8%	(21.5%)	35.0%	27.2%	(0.0%)	20.0%	32.0%	(15.1%)	0.0%	0.0%

- 勤務年数も多様。ベテラン配置への配慮も窺える。

表22

	0-5年		6-10年		11-20年		21-30年		31-年	
学校数	41	57名	40	58名	51	63名	23	27名	18	22名
割合		25.1%		25.6%		27.8%		11.9%		9.7%

# 専任相当数と担当乳幼児数

表21

	定期的支援児	専任相当	乳幼児／人
全国	18.69	1.91	9.77
北海道	15.67	1.83	8.55
東北	8.71	1.46	5.98
関東	27.63	2.30	12.04
北陸	18.86	1.51	12.45
東海	31.50	2.60	12.12
近畿	23.25	2.66	8.75
中国	7.11	1.36	5.25
四国	8.00	1.67	4.80
九州	12.54	1.40	8.93

○兼任者の業務量平均を専任者の0.57人分相当と推計し算出すると、専任相当数は全国平均1.91(1.36～2.66)名、教員1名の担当乳幼児数平均は9.77(4.8～12.45)名。地域差もかなり見られた。

○8割の学校で教室を確保しているが、旅費、教材費等は公費予算なしが半数以上だった。

# 教員配置への様々な努力

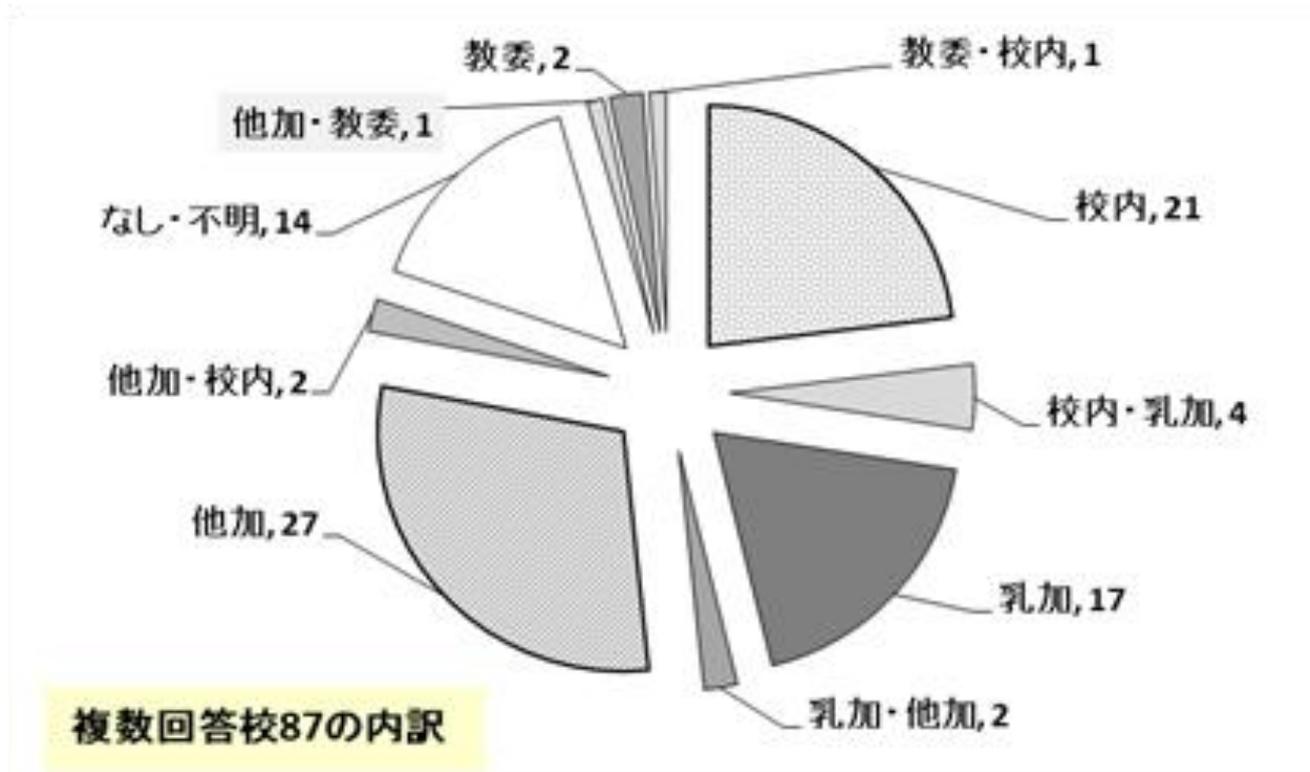


図23

校内: 校内操作 教委: 教育委員会と相談  
乳加: 乳幼児教育相談のための加配  
他加: 乳幼児教育相談以外の事業による加配

# 乳幼児教育相談による 早期対応の成果

- **保護者・家族への影響**: 心理的安定、家庭での養育・育児、家族の障害理解・認識・成長等
- **子供への影響**: 情緒・心理・社会性発達、聴覚活用、手話活用、コミュニケーションの早期形成、言語発達・音声等
- **社会参加**: 進路・進学支援、関連機関との連携
- **教師・教育運営他の影響**: 個別発達理解、子供との関わり方、保護者との密接な関係形成、学級のまとめり

# 保護者が最も支えになったこと

- 子供や家族のことなど個別の相談ができたこと  
⇒ 定期的な支援（同じ先生に相談できる、障害の理解、子育ての見通しがもてる、保護者の心理的安定につながる）
- 保護者同士の交流や話し合いができたこと  
⇒ 同じ障害のある子供と保護者との出会い、先輩となる子供や保護者から成長が見通せる
- 具体的な育児・発達支援ができたこと

# 保護者による保護者支援内容の評価

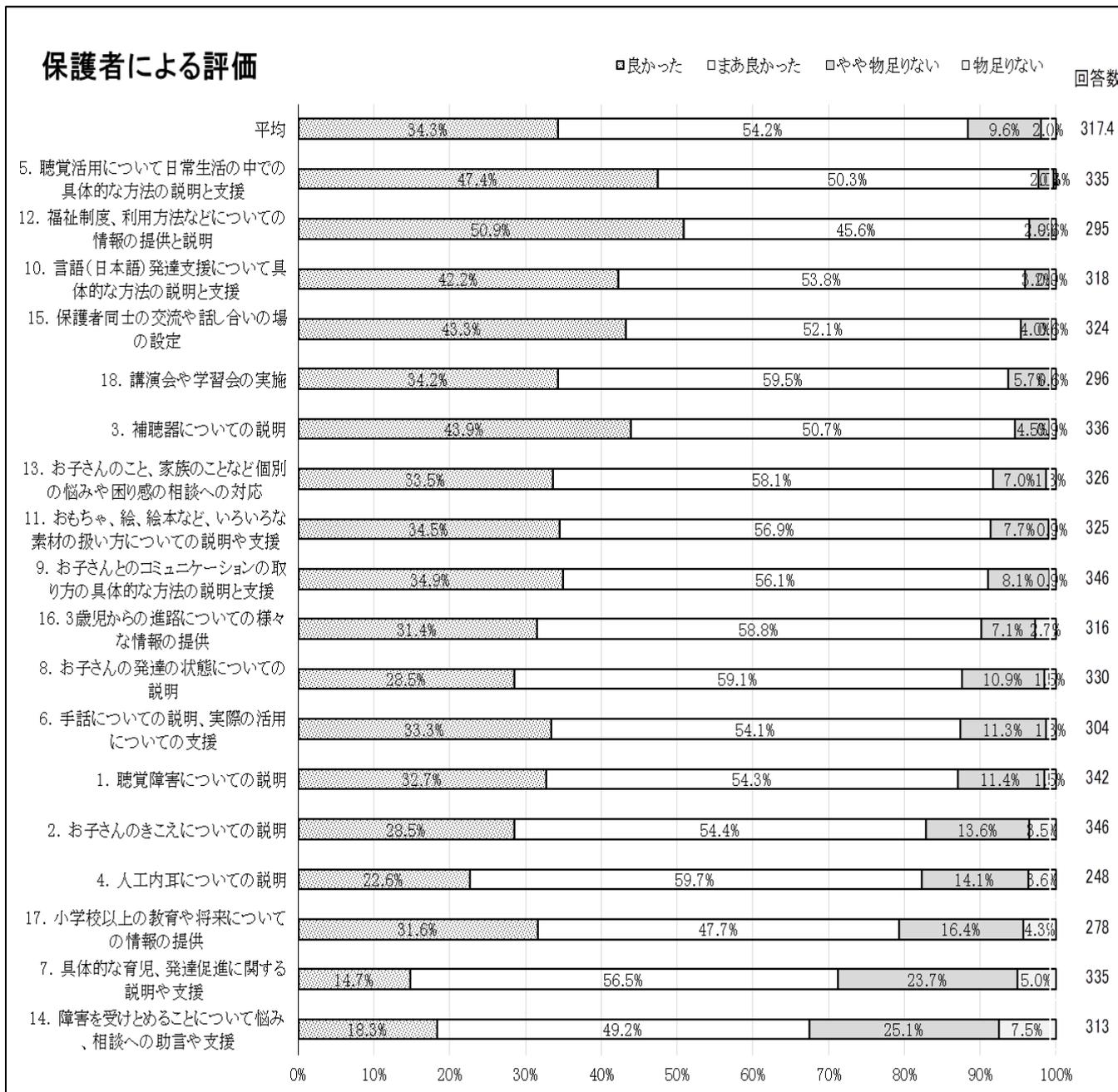


図7 保護者による評価

## 2歳児での通学回数とそれに対するについての意見

表10 個別指導回数

回答総数	週平均回数	週最小回数	週最大回数
310	0.59	0.075	4

表11 グループ指導回数

回答総数	週平均回数	週最小回数	週最大回数
288	1.04	0.075	4

表12 個別指導相談回数

回答総数	ちょうどいい	もっと少ない方がいい	多い方がいい
327	256	6	65
割合	78.3%	1.8%	19.9%

表13 グループ指導相談回数

回答総数	ちょうどいい	もっと少ない方がいい	多い方がいい
302	237	12	53
割合	78.5%	4.0%	17.5%

# 乳幼児教育相談の活動の実際

- 集団(グループ)指導
- ⇒おあつまり(呼名、挨拶、カレンダー等)、行事、音楽遊び、発達支援遊び、親子交流遊び、音遊び、コミュニケーション遊び等
- 個別指導 ⇒補聴器、聴覚活用、発声発語、手話、発達支援等
- 保護者支援 ⇒乳幼児の養育、障害支援、ろう家族への配慮、手話使用の支援、人工内耳装用の配慮

# 活動の実際(グループ指導)

## 親子の活動+保護者支援(講座)

- 体を動かして遊ぼう:親子で楽しむスキンシップ遊び
- さつまいもをさわろう:季節の野菜
- クリスマスツリー飾り:制作遊び
- 誕生会:家庭で生かせる身近な行事
- 保護者講座:成人ろう者の話を聞く会、ミニ学習会(聴覚障害って何?）、懇談会、手話学習会、ロールプレイ(聞こえない体験)

# 乳幼児教育相談担当者の専門性

- 教育相談、カウンセリング等の基礎的素養
- 関係機関等とのコーディネート、マネジメント能力
- 乳幼児の発達や医学、福祉に関する知識
- 聴覚障害の理解、聴覚の評価、補聴器に関する知識・技能(軽度から重度までの医学的知識等)
- 保護者支援
- 保育:個別指導、グループ指導
- 進路指導:幼稚部、幼稚園、保育園、他の機関との橋渡し

# まとめ①

- 乳幼児教育相談の必要性、重要性の明確化  
☆相談の早期化、対応の多様化に対し、保健、医療、福祉、教育等の機関とどのように連携した体制づくりをするか。
- 課題の整理  
☆制度上の課題と解決に向けた論点整理
- 乳幼児教育相談担当者の育成  
☆多様な専門性を必要とする担当者を計画的、組織的に育成、維持できるか。

## まとめ②

### 乳幼児教育相談の充実に向けて

- ①専門性のある教員の配置：国の加配の充実
- ②外部専門家（PT、ST、OT等）の配置の充実
- ③保健、医療、福祉、教育等の機関の円滑な連携ができる体制の整備

# 乳幼児教育相談の充実

子供の一生の基盤づくりにつながる保健、医療、福祉、教育等の連携